

研究室紹介

平城宮跡発掘調査部史料調査室

平城宮跡発掘調査部史料調査室は、平城宮・京の発掘調査で見つかる木簡の整理・解説、及び遺跡・遺物の文献史料からの検討を担当しています。今年5月に出土文字資料として初めて重要文化財に指定された大膳職推定地の木簡を初め、1961年に平城宮で最初の本簡が見つかった以来これまでに出土した平城宮の本簡は約5万点、長屋王家木簡・二条大路木簡という平城京内の二大木簡群を含めると、私たちが担当する本簡は17万点にも上ります。これらの本簡の一つひとつから最大限の情報を引き出して公開し、また本簡そのものをしっかりと守り後世に伝えていくのが史料調査室の責務です。いわば古代の証人である本簡の番人ともいえるでしょう。全国出土の本簡は25万点、その約7割を現在3人のスタッフで維持しています。いずれも文献史学（日本古代史）が専門で、発掘調査にも参加しています。

本簡は、たっぷりの地下水に保護されながら溝・井戸・土坑などの中で粘土や砂にパックされ、日光と空気から遮断された状態で初めて、1300年もの間腐らずに残ってきました。ですから、現場で文字があるのがわかっても、炎天下で泥を落として文字を読むのは禁物です。整理室に持ち帰って筆や竹串を使って慎重に泥にまみれた本簡を洗うのです。

ところで、本簡を使う利点の一つは、何度も削り直して再利用できることで、削り取られたカンナ屑状の細片に文字が残ることがあります。これを削屑はぶくずと呼びます。削屑や破片の現場での選別は不可能なので、土ごと整理室に持ち帰って洗浄します。微細な断片も逃さぬよう、ふるいの上で土の塊を手にとって、少しずつ丁寧に泥を落としていきます。長屋王家木簡や二条大路木簡が出土した時には、コンテナ1万箱分の土を、実に5年半かけて洗いました。

本簡を読む最も基礎的な作業は、本簡を肉眼でじっくり観察してスケッチすることです。私たちはこれを「記帳」と呼びます。水の中で本簡を少し傾けると、光の屈折の関係で墨痕が見やすくなります。微妙な筆の動きを漏れなく観察して記録します。記帳は本簡を読む作業の基本中の基本で、微細な削屑も1点1点記録します。文字の残りが悪い場合には、赤外線テレビカメラ装置も有効です。墨は赤外線を

吸収するので、墨の部分が強調され、また木目の情報が捨象しやしょうされて見やすくなるのです。

記帳が終わると、専門のスタッフによる写真撮影です。本簡のようなコントラストの弱い文字を鮮やかに出すのは至難の業です。原寸大の焼付けを作り、本簡1点ごとに台紙に貼って研究用資料とします。

読みが確定したら、主な本簡を『平城宮発掘調査出土本簡概報』（既刊37冊）として公表します。最終的には、一文字でも読めるもの全ての鮮明な写真図版と釈文（解説付）を収めた『平城宮本簡』（既刊5冊）、『平城京本簡』（既刊2冊）という正報告書として結実します。その後本簡は科学的に保存処理を行いますが、それまでは水（防腐剤としてのホウ酸・ホウ砂の薄い水溶液）に漬けた状態で、温度湿度の変化の少ない収蔵庫に保管しています。ただ、水の減り具合や汚れ具合のチェックは欠かせません。脆弱な遺物の管理には細心の注意が必要です。

こうして私たちが解説した本簡のデータは、奈文研のホームページでも、本簡データベースとして画像とともに公開しています。ここには本簡学会の協力で、全国出土の本簡のデータも入っていて、全国の本簡を一文字単位で検索することができます。

なお、私たちは42年間培ってきた本簡の文字を読むノウハウを、できるだけ学界共有の財産として生かしていければと考えています。現在日本学術振興会から科学研究費補助金をいただいて「本簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発」という5カ年計画のプロジェクトを所外の先生方のご協力もいただきながら進めています。本簡解説技術を蓄積し、より客観的な検証可能なシステムとして提供したいというのがこの研究の主旨で、数年後にはより豊かな古代の文字の世界をみなさんにお見せすることが可能になることでしょう。

（平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏）



本簡庫に眠る水漬け状態の本簡